



Reportage

モノをつくる力で、コトを起こす

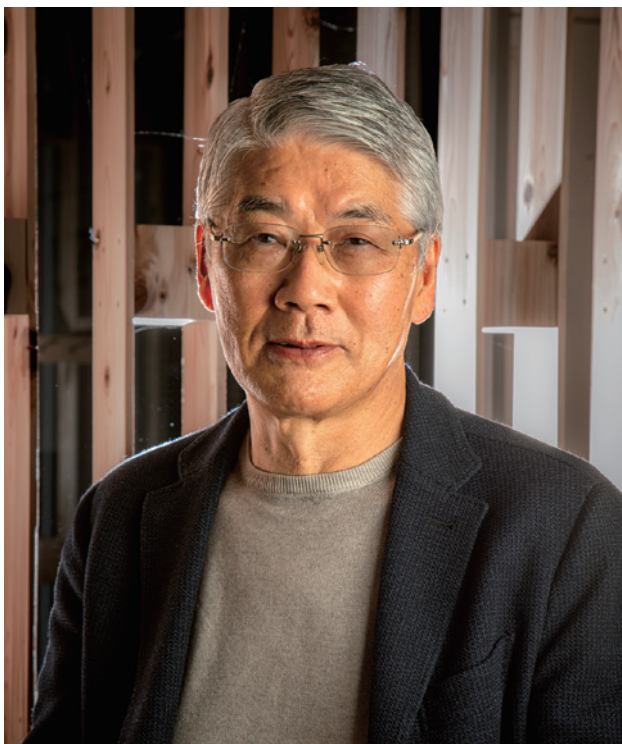
# 起業家精神を育む 「神山まるごと高専」と、 大きく人が育つ 小さな町の物語

地方創生のロールモデルといわれる徳島県神山町に、今年4月開校する「神山まるごと高等専門学校」が話題です。同校が掲げる起業家精神=アントレプレナーシップとは何か、なぜそれが、小さな山間の町で育まれるのかを取材しました。



2023年4月、「神山まるごと高等専門学校」(以下神山高専)という名の高等教育機関が開校する。19年ぶりとなる新設の高専だ。育てたいのは、「モノをつくる力で、コトを起こす人」。デザインおよびテクノロジーといったモノをつくる力を基盤に、起業家精神を育むという、これまでにない学校であり、卒業後の進路イメージとして、「就職30%、編入30%、起業40%」を掲げている。「美大、工学部、MBAを合わせたような学校」という例えがわかりやすい。一学年の定員は40人で全寮制。一期生の学費の実質無償化が発表され、二期生以降もその実現を目指している。

注目すべきはキャンパスが置かれた場所。徳島県の山間に位置する人口5000人ほどの神山町は、「奇跡の町」「最先端の過疎地」とも呼ばれるなど、地域創生のモデルとして知られる。急速な人口減少が進む一方で、数々のベ



認定特定非営利活動法人グリーンバレー 理事  
神山まるごと高専設立準備財団 代表理事

大南信也さん

ンチャー企業がサテライトオフィスを構え、ユニークな移住者が次々とやってくる。「よそ者」と町民が絶妙な距離を保ちつつ融和し、食や林業を中心に循環型経済が構築されつつある。

地域と連携した教育も盛んで、神山高専の誕生もこうした土台があっこそ。そのことを理解するために、また、この町の人々がもつアントレプレナーシップを感じるために、まずは地域創生のキーパーソンである大南信也氏の視点を借り、町の30年を振り返ることから始めたい。

## 第一章

### なぜ小さな田舎町によそ者やITベンチャーが魅かれるのか

始まりは1990年、建設業を営んでいた当時37歳の大南氏が、PTA副会長を務める小学校に保管されていた青い目の人形に出会ったことだ。戦前に友好の証として米国から送られてきた、同人形の里帰りプロジェクトが企画され、30人の訪米団が現地で歓迎された。この成功体験を基に大南氏は、継続的な草の根の国際交流を行う場として神山町国際交流協会を立ち上げる。そして県が構想する国際文化事業に乗る形で、アーティスト・イン・レジデンスという活動を開始した。国内外のアーティストを一定期間招き、住民と交流しながら創作活動に専念してもらおう取組だ。何もなければ緑はあって人もいる。居心地の良さから、そのまま定住する人も現れた。「やったらええんちゃう」が口癖の大南氏。そんな緩さがあり、よそ者に温かい町として知られたことで、また、他に先駆けた光ファイバー網の整備や、県が進める移住支援も追い風に、起業を希望する移住者が増えていった。だが移住にミスマッ



チは付き物。そのため半年間かけて地域づくりを学びながら現地に親しんでもらう「神山塾」という地域人材育成事業も開始した。2010年には、ITベンチャーのSansan(株)が、働き方改革の一環でサテライトオフィスを開設。町内にコワーキングスペースを整備したこともあり、多くの企業が拠点を構えるようになった。ちなみに、Sansan社長の寺田親弘氏はこのころから「上場を果たした後はエネルギーと教育に取り組みたい」と熱心に語っていたことを大南氏は覚えている。

この間、神山町国際交流協会はNPO法人化され、名をグリーンバレーと改めた。大南氏が学生時代に過ごしたシリコンバレーにあやかってのことだ。自由な雰囲気の中なかで何かが生まれる町にしたいという願いの通り、次々と新しいコトが生まれていった。

その古参メンバーで、外国人や神山塾生に、住まいを提供するなど支援を続けてきた「神山の母」的存在がいる。栗飯原國子さん(80)だ。最近まで、主婦仲間と開業した梅星茶屋という食堂で、週一回手料理を振る舞っていた。驚くのは、当時67歳だった國子さん自身が神山塾の一期生だったことだ。

「外から来た若い人との会話で、わからない言葉がたくさんあったのが腹立ってね。歳もいってたけど塾長に無理言って参加させてもらったんよ。人生で最高にリッチな半年間やった」

コトを起こすのに年齢は関係ないことを教えてくれる。

## 住民が危機感を共有し 自分事として未来を切り拓く

栗飯原夫妻や大南氏に代表される住民の



町の中央を流れる鮎喰川沿いに新築された木造平屋建ての校舎(右)。神山産の木材がふんだんに使われている。川を挟んで左奥に見えるのが、神山中学校の旧校舎を改装した学生寮。校舎をオフィス、寮をホームと呼ぶ。

温かさや寛容さ、何より人の縁によって、多くの方が導かれるように町にやってきたが、人口減少は止まらない。消滅可能性が高い自治体の上位にあげられたこともある。

そんなとき転機が訪れた。政府が地方創生を打ち出し、神山町でも総合戦略策定の議論が住民を交えて始まったのだ。その名も「まちを将来世代につなぐプロジェクト」(つなプロ)。「すまいづくり」「食べる」「育つ・学ぶ」などのワーキンググループ単位で意見が交わされた。

このWGにはポイントがあった。議論に先立ち「私がやる、という主体者がいないプランは採択しない」と宣言されたことだ。他人事のような案や理想論は必要ない。この機を逃したら町の復活はない、という危機意識が共有されていた。そのため半年間の議論を経て、2015年暮れにまとめられた戦略はすべて実現を前提としたものだ。当時、町職員だった白桃 薫氏が属した「食べる」グループの提案も然り。このとき町の重鎮が居並ぶ席で白桃氏がした発言が語り草になっている。

「このプロジェクトをぜひやりたい。今の立場のままではできないのであれば、公務員を辞めてでも関わりたい」

実は白桃氏は当初、「また、骨を埋めるつも



りのない移住者やIT企業を優遇する施策が始まるのか」と議論自体を冷ややかな目で見ていた。しかし移住者と腹を割って話すうち、町を良くしたいという思いは同じであることがわかり、心境が一変したのだ。

本人は、大袈裟なことを言ったつもりはないというが、発言を受けた側は心を動かされた。大南氏は「町が変わることを確信した瞬間でした」と語る。

後にまとめられた同プロジェクトの資料には、次のように書かれている。

——よく出来た計画書をつくっても実行出来なければ意味がありません。そのようなことにならないように「いまやるべきこと」と、「いまできること」が十分に重なる神山町の創生戦略づくりを心がけました。「できること」の中で最も重要なのは、それをやる意欲と力を持ち合わせている人がいることです

新たな価値を生み社会に変化をもたらすマインドがアントレプレナーシップだとして、それを行う主体は誰か。他の誰かではなく自分だ。白桃氏はフードハブ・プロジェクトという地産地食を進める法人の設立に関わり、数年後、それに専念するため役場を退職。現在は、農場や食堂・パン屋などを運営するほか、神山高専と連携し、寮の給食で提供する食材すべてを地場のもので購入することを目指す新たな挑戦も始めている。このほか、町の林業を活かした住宅づくりなどのプロジェクトもスタート。官と民の間を取りもつ存在として、「神山つなぐ公社」という公的機関も設置された。その仕組みのお陰で、地元の児童・生徒が、地域と共に学ぶ活動も盛んになっていった（城西高校神山校の実践は39、40ページ参照）。

## 第二章

### ゼロからの学校づくり 賛同者はどう増えていったのか

同じころ、サテライトオフィスを構えて以降、町に深くコミットしてきたSansanの寺田社長が夢実現に向けて動き出す。モノづくりの力を武器に社会を変えられる人材を育てたい。そのためには新しい学校が必要であり、神山町ならそれができるはずだと。寺田氏もシリコンバレー駐在経験があり、田舎からクリエイティブが生まれることを肌感覚として知っていた。

慎重論は出つつも、用地の無償貸与ほか、町が全面的に後押ししてくれたのは、「つなプロ」での議論があったからと大南氏は考えて



神山まるごと高専 事務局長、副校長  
松坂孝紀さん

いる。危機意識を共有したことと、一人の熱意が「コトを起こす」ことを体感していたからだ。

そして寺田氏をはじめ、クリエイティブディレクターの山川 咲氏、学校長の大蔵峰樹氏、カリキュラム・ディレクターの伊藤直樹氏(後述)を中心に、プロボノ(専門性を活かしたボランティア)を含め、多くの関係者を巻き込みながらビジョンは共有された。

事務局長・副校長の松坂孝紀氏もその一人だ。人材系のコンサルタントをしていたが、元上司の山川氏から学校づくりの手伝いを打診され理念に深く共感した。ただ、経営を任されていた子会社を辞めることに迷いがあった。かといって会社に籍を置きながら手伝うような中途半端はしたくない。

「地方自治体のコンサルティングを手掛けるなか、現地に身を置くことの重要性を痛感していました。やるなら中心となる誰かが移住する必要があるし、それは自分だと思いました」

悩んだ末、会社のメンバー一人ひとりに言葉を尽くしたうえで、その年のうちに家族と共に移住した。

## 新しい教育に賛同し、全国から教職員や関係者が集まる

公募に応じ教員も続々と神山町にやってき



栗飯原康史・國子さん

た。昨年度まで鳥取県の私立高校に勤務していた大山力也先生もその一人。前任校では、持ち前の外交性を発揮し、地域の起業家を招いて連続講座を企画したり、シリコンバレーと教室をつないだ起業家育成プログラムを行ったり、アントレプレナー部の顧問として絵や音楽の才がある生徒をプロデュースしたりと、学校と社会とをつなげる活動を続けてきた。

「職業観が乏しく、学校内で世界が完結している生徒の目を開かせたかったんです。世の中には多様な働き方があるし、自分で新しい職業をつくったっていいはずですから。私自身が教師として楽しむ姿を見せながら、そうしたことを伝えようとしてきました」

ただ、大山先生が大切にしてきた地域に開かれた活動も、受験を前に遮断されてしまうことに徒労感があった。

「危機感を抱いたのは、地域の人と真剣に向き合うべき活動が、AO・推薦入試のためのツールと化しそうな現実でした。そういう私自身、生徒の動機付けのために『受験でも役立つよ』と言ってしまうこともある気持ち悪さ。そんなとき神山高専のことを知り、5年間かけてトライ&エラーを繰り返すことで生まれる学生の成長を見てみたいと感じたんです」

もう一人、春田麻里先生は、徳島県の高



㈱フードハブ・プロジェクト 共同代表取締役、農業長 白桃 薫さん



校教員の職を辞してやってきた。

「進路指導中心にやってきたこともあって、親しい同僚からは『これまでの経験が活かせる場なの？ 公務員を辞めて大丈夫？ 東京の人に騙されてない？』と心配されました」

それでも、新しい世界に飛び込んだのは公立高校でやれることに限界を感じていたからだという。

「前任校では社会的起業に関心をもつ生徒が多く、活動の後押しをしていました。管理職に掛け合ってクラウドファンディングに成功した生徒もいました。そうした活動や探究的な学びをしたいのに、結局は受験ありきの教科指導に重きが置かれてしまう。こういう教育は簡単には変わらんやろな。あかん、このままでは寿命が尽きてしまう、という焦りがあったんです」

こうして意欲に燃えるメンバーが集まるが、前例のない学校づくり。1000ページに及ぶ認可申請書類の作成をはじめ、やることは山ほどある。当局からは、サステナブルであることが厳しく問われ、「100年、200年続く学校をつくる覚悟はあるのか」と自問する日々が続いた。今あるルールの上で新しいものをつくることの難しさも痛感した。だから2022年8月、文部科学省から設置認可が下りたときの喜びと安堵感は想像に難くない。学校づくりは起業体験そのものと同様関係者は口を揃える。ただ、

大人が主人公となる物語はここまで。これからはもちろん学生が主役だと松坂氏は強調する。

### 第三章

## 起業家精神とは何か それを、どう育むのか

ここまで起業家精神をキーワードに、神山高専誕生に至るプロセスを駆け足でたどってきたが、では改めて神山高専が考える起業家精神とは何だろう。学校案内には、「まだない価値を生み出す」「世の中に変化をもたらす」といった文言が並ぶが、関係者の口からも同様の言葉が出てきた。

「与えられた条件やその組み合わせで、新しいものを生み出すこと」(大南氏)

「未知の世界に飛び込む力。まだ見ぬものに向き合う力」(松坂氏)

「したいと思ったことを実現できる、そのためのスキル」(大山先生)

では、そうしたものをどのように育てようとしているのか。カリキュラム・ディレクターの伊藤直樹氏(クリエイティブ集団PARTY代表、京都芸術大学教授)は次のように説明する。

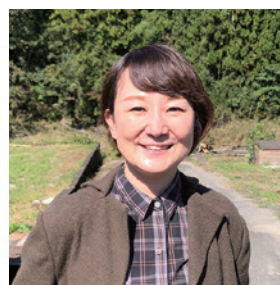
「失敗学やポジティブ心理学、リーダーシップほか、欧米の起業家が学ぶような経営学の講義や、大志を抱きやすい哲学的な授業も用意しますが、あくまで“精神”ですから、教科



カリキュラム・ディレクター 伊藤直樹さん



社会科担当教員 大山カ也先生



国語科担当教員 春田麻里先生



書で身につくものではありません。大切なのは『失敗してもいい。まずはやってみよう』といった気持ちになることです。近道は、実際の起業家と直に触れることなので、その機会は数多く用意しています。起業家講師には、やりがいでだけでなく、資金調達の難しさや、仲違いでチームが分裂した苦悩など、生々しい話も伝えてほしい。15歳を大人として接してほしいのです」

38ページ上の図は伊藤氏が作成したカリキュラムの概念図だが、起業家精神についてこう補足する。

「コトを起こすだけなら一人でもできます。でも今の時代で大切なのは、人とのコラボレーションであり、共に生きる力。それらを含めて起業家精神と捉えています。いずれにしろ、この図はあくまで理想像。ビジョンだけ掲げても学校はできませんから、それを具体化するために先生たちと対話を重ねています。中3生等対象のサマースクールでは、架空のスタートアップのミッションやビジョンを英語でプレゼンする模擬授業を設計し、手応えを得ました」

神山の地域性を活かしたフィールドワークや

PBL型の授業も数多く計画されている。「循環型プロダクト演習」は、ゴミ問題を題材に持続可能な社会に貢献するプロダクトを企業担当者とデザインし、プログラミングから実装まで一年かけて行う予定だ。

課外活動や学生生活においても、起業家精神の涵養が意識されている。

「例えば寮では洗濯機の数に限られているため、揉めることが目に見えています。けれど先回りしてルールをつくることはしません。問題が生じたときに自分たちで話し合い、改善していける余白を意図的に設けます。寮生活も改善できずに世の中にイノベーションを起こせるわけがありません。まずは、身近なところから。学校の中には、『こうしたらもっといいよね』と思える機会がたくさんあるはずですよ」

まさに、半径5メートルから始まるアントレプレナーシップの育成だ。そして、こう付け加える。

「社会の側から見て我々が『こんな学校があったらいいのに』と思うように、高校の先生方も『こういう社会だったらいいのに』と思うことがあるでしょう。そうした思いを共有し社会をより良くしていきたい。神山高専の卒業生がそうした役割を率先して果たし、それに影響された人たちが各地でコトを起こす。そんな世界を期待します」



一連の取材で気づいたことがある。「どのような未来を築きたいか」という質問に対し、それぞれ理想は語るものの、同時に、現時点での目標に縛られず、過程で起こる変化を楽しみたいといった意味のことを答えるのだ。例えば、

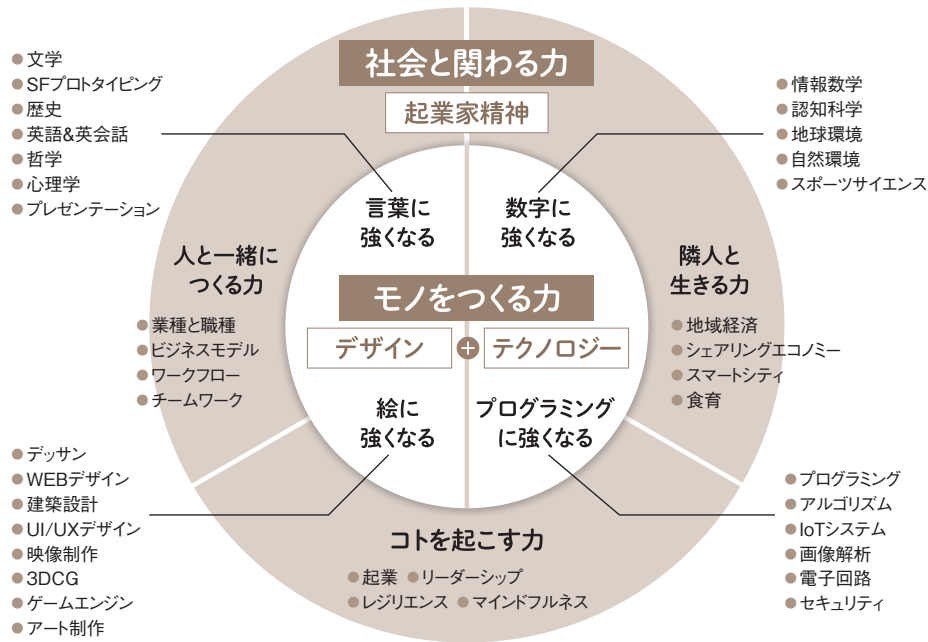
「何も時代を先取りしようと、スローガンを掲げ、ストーリーに沿って今に行きついたのではありません。現条件下の最適化を行うなか、その時々



神山町内のコワーキングスペースに設置された「神山まるごと高専設立準備室」にて。現時点で、現職の高校教員をはじめとする21人の教員が集まった。このほか、一線で活躍する起業家約50人が特別講義を担当する。



## 図 神山サークル



※資料を基に編集部で作成

に現れる別の条件も飲み込み、形を変えながら、違う次元に到達した感じです。『変化の、その先にあるものを見てみたい』というのが私の変わらぬモチベーションです」(大南氏)

「経験上、絶対これをやり遂げる、みたいに肩肘を張ると、いいことになりません。もっとリラックスして目の前にいる人と向き合い、語り合うことで物事は立ち上がってくるし、やる気も高まってきます」(大山先生)

「最初に着地点を決めきらんことが大事なかな、と思っています。高校現場では、そっちに行っても道はないよ、という教師の心配をよそに勝手に向かっていく生徒もいますが、案外、新しい道を拓き、『ほら、道はあったでしょ』と教えてくれるので」(春田先生)

コンサルタント出身の松坂氏が移住を決断したきっかけも、まさにこれだ。

「コンサルタントが町づくりに関わるときって、最初にシナリオをつくり、それに沿って進めることが普通なんです。そこでは偶発性や変動

性はリスクとしてカウントされ、排除すべきものとして捉えます。ただ、そのやり方で百点の仕事はできても、想像を超えてくるエクセレントなものってできないんですよね。そこに限界を感じていました。そんなとき神山町を初訪問し、ある移住者の方から『町って、つくられたいと思ってないんですよね』と言われ、ハッとしました。そうか、だからこの町はどこか違うんだと。偶発性や変動性を含む、多様な人との関わり合いのなかで物事は予期せぬ方向に進化を遂げていく。自分がしてきたことを根本から問い直し挑戦するチャンスだと思い、移住を決めたんです」

このように考えると、理想と現状の差を課題として捉え、それをいかに埋めるかという実行力や意志の力だけではなく、結果に拘泥せず、プロセス自体を楽しむ柔軟性や好奇心もまた、アントレプレナーシップを構成する要素であり、学校現場でも大切にされるべき視点なのかもしれない。





# 地域との協働を通して表れた アントレプレナーシップの兆し

## 城

西高校神山校は、神山町にある唯一の高校だ。伝統的に造園教育に力を入れてきた農業系の高校で、町の人は親しみを込めて、以前の校名である「神山分校」と呼ぶ。ただし、生徒の大半は、徳島市内からバスで1時間以上かけて登校してくる。逆に、神山町の中学生の多くは、普通科を志向し徳島市内などに出ていってしまう。

こうした状況を打開しようと同校では、神山つなぐ公社の力を借りながら地域を学びの場とした教育を実践してきた。例えば、耕作放棄地の棚田を再生し、小麦・そばの栽培・加工・商品開発などを行う「まめのくぼプロジェクト」。山で集めた種や実を苗木に育て、公共施設の植栽などに活用する「どんぐりプロジェクト」。高齢者の自宅を訪ね、庭木の手入れなどの手伝いをする「孫の手プロジェクト」。ほかにもフードハブ・プロジェクトと協働したメニュー開発や、木工製品の製作・間伐体験を行う森林女子部の活動など、学校設定科目「神山創造学」を中心に、課題研究や専門科目の授業、課外活動などさまざまな場面で取り組んでいる。かつて同校の勤務経験があり、2022年度に教頭として赴任した仲野 節先生は話す。

「10年ぶりに戻ってきて、生徒の変化に驚きました。学校運営協議会など大勢の大人を前にした発表で物怖じしないのもすごいし、教室内



教頭・仲野 節先生(左)、教務主任・阿部三代先生(右)



でのちょっとした発表では、発表したクラスメイトに必ず拍手をするなど互いを尊重する様子が伺えます。学校の自慢です」

人数はわずかだが県外募集枠を設け、町営寮「あゆハウス」も完成したことで、各地から生徒が集まるようになった。大阪出身の砂川康介さん(3年)は、神山町に来た理由を次のように話す。「地元の大阪では中学校の先生や、駅ですれ



環境デザインコース3年で行われた庭園施工実習のひとつ。地元の造園業者の協力の下、クレーンを使って巨大な庭石を正門前の庭に配置している。生徒の希望で実施された授業で、設計も生徒たちが行う。安全面に配慮するほか教員は口を挟まない。



「神山町で育ち、中学まで周りは顔馴染みばかりでしたから、高校で多くの人に会い、いろいろな考え方があることに気づきました。私は大学進学のため県外に出ますが、高専ができることで若い人がたくさん来ると思うので、その人たちを通じて神山の名が広まれば嬉しいです」(影 紗那さん)「若い人だけでなく、さまざまな大人も増え、ますます町が面白くなっていくと思います。けれど、神山町に元々ある良さは、失わずに残してほしいです」(砂川康介さん)。

違う大人がすごく疲れて見えたんです。なので高校は地方に行きたいと思いました。地域留学が盛んな島根県も見学し、印象は良かったのですが、神山町は、会う大人全員が目キラキラしていて、そこに魅かれました」

あゆハウスは、食事づくりを含め生徒が暮らしに深く関わるユニークな寮だ。親元を離れ、意志をもって未知の世界に飛び込む姿勢はアントレプレナーシップそのもの。仲野教頭は言う。「起業家という遠い存在に聞こえますが、例えば栽培した小麦やそばを製粉するだけで終わらせず、付加価値をつけて新しい商品を生み出すなど、現状に満足せずワンランク上のモノに

しようとする意欲だって起業家精神の表れだと思います。チームプロジェクトを通じて、そうした気持ちが芽生えているのを感じます」

教務主任で、赴任7年目の阿部先生も言う。「県外から来た積極的な生徒に刺激を受け、町内に住む生徒も負けじと動いてますし、町外から通う生徒も、何かしようという気持ちになっています。町のあるイベントにクラス全員を連れていったところ、普段意欲的に動かないような生徒が、農場で収穫したサツマイモを楽しそうに販売したり、お年寄りの買い物を手伝ったりしていて、こういう一面もあったんだ、と嬉しくなりました」

2019年度に学科再編により、造園土木科・生活科に代え、地域創生類(環境デザインコース、食農プロデュースコース)を設置。同年度から3年間の文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」の研究指定校に。2022年度にはコミュニティスクールになるなど改革は加速している。

近くに神山高専が開校することで、地域からの注目や教育資源が移ってしまうのでは、と心配する声もある一方、農業分野での協働や学校行事・課外活動での連携、教員間の交流ほか、今までとは違うタイプの若者が町に来ること

で生じる相乗効果に期待もする。

■ 神山校、神山町をより知るための一冊

『まちな風景をつくる学校』  
森山円香著(晶文社)

『神山進化論』  
神田誠司著(学芸出版社)



## 編集後記

アントレプレナーシップとは何か？ 育むとはどういうあり方か。編集部でも明確な解をもつことができないまま、それでも何かありそうだという予感から動き出した本特集。取材を進めるなかでまず初めに驚いたことは、どんなにすごいと言われている発見や事業でも、身近な気づきを起点としているものが圧倒的に多いということだ。人知れず問いと失敗を繰り返しながら、人々が求める今の形がある。そしてこの過程は、「探究学習」において日常生活や社会に目を向け、自己のあり方・生き方と一体的で不可分な課題に向き合い続けていく姿勢とも、大いに重なり合うのではないだろうか。深くその世界を知れば知るほど、「既に各学校で取り組まれているもの」のなか、もしくはそれらに少しエッセンスを追加するだけで、アントレプレナーシップ“教育”をも、兼ねることができるよう感じた。

また、取材をしたアントレプレナーたちが、子どものようにキラキラした瞳で自分の話をされることがとても印象に残った。誰もが幼いころからもっていた、「あれ、なんだろう？」と頻繁に道で立ち止まってしまふほど強い、身の回りへの興味・関心。それこそが「身近な気づき」へと繋がっていくのだとしたら、私たちは誰しもうも、その発見の機会をもち得ているような期待を感じた。

自分だけの密かでドキドキする小さな気づきが、行動に移して目することで、目の前の景色を変え、町を変え、社会を変え。そして、まだ見ぬ自分へと出会わせてくれるきっかけになるのかもしれない。

赤土豪一(本誌 編集長)

